

2025（令和 7）年度

国語

13 : 30 ~ 15 : 10

文学部

国文学科

一般選抜(中期日程)

注意事項

1. 合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. 問題は1～12ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、よごれの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された解答欄に記入しなさい。
5. この冊子は持ち帰ってさしつかえありません。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

西洋の伝統において、視覚が「最も高貴な」感覚とみなされてきたとすれば、触覚は階級的に最も低いものとして位置づけられてきた。触覚の非合理的で非合理的なイメージは、アリストテレスの知覚論ですでに提出されている。西洋における知覚のイメージにとって彼の著作は決定的な影響を持っているので、本論に入る前にまず彼の触覚論を見なければならぬだろう。

アリストテレスの理論では、視覚と触覚は全く異なる性格を持っている。視覚については、たとえば『形而上学』の冒頭で、「見ることは、他のいずれの感覚よりも最もよくわれわれに物事を認知させ、その種々の差別を明らかにしてくれる」と述べられているように、「認知」との結びつきの強さが強調されている。しかし、この「認知」は単に生理学的な意味で物の認識を指しているだけではない。視覚は人間の知性や芸術的な能力と直接的な関係を持っているとアリストテレスは信じていたのであり、よりよく知覚することはよりよく創作や生産をすることと直接に結びついていた。このように、アリストテレスにとって視覚は事物をよく認識し、生産的、創造的に世界に関わるために重要な知覚様式だったのである。

一方、生命体についての研究である『魂について』は、触覚をすべての命あるものが等しく「持たなければならない」知覚のモードであると定義している。

あらゆる身体「物体」は触れられるものであり、触れられるのは触覚によって感覚されるものである以上は、もしその動物が生存し続けようとするならば、動物の身体も触れる能力をそなえていなければならない。

アリストテレスにとって、触覚は感覚の一つであるというよりは身体が存立するための条件である。それは生命が栄養を得て環境のうちに生き延びるために不可欠なものであり、したがって「生命」という概念そのものと深く結びついているのだ。ヒュー・ローソン・タンクリッドは、アリストテレスが触覚を論じるときには、「一般的な生命機械論の立場」に立つて人間を考察してい

ると述べている。すなわち、心や魂についてコウリヨすることなく、単純に生存するための肉体として人間をハイクしている^⑦ということだ。生命の生物学的な条件に関して言えば、^Aアリストテレスの理論において触覚は疑いなく根本的なものということになる。『魂について』の最後の章は、触覚の地位を知覚の根本的な「媒介」として確立している。

触覚がなければ、他のいかなる感覚ももつことは不可能である。実際、すでに述べたように、魂をもつ物体「身体」はすべて、触れる能力をそなえているのである。また土を除いた他の基本要素は感覚器官を構成できるだろうが、その感覚器官はすべて他のものを通じて、すなわち中間の媒体を通じて感覚することによって、感覚を生み出すのである。これに対して触覚は、対象そのものに触れることによって成立するのであり、だからこそまたこの「触覚」という名称を与えられているのである。たしかに他の感覚器官が感覚するのも接触によってであるとは言えるが、しかしその接触は他のものを媒介してである。だが、触覚だけは直接それ自身を通じて感覚すると一般に考えられている。

耳や目、鼻など特定の身体器官に媒介されている他の感覚と違って、触覚は人間の身体をくまなく覆う皮膚を受容の窓口として、直接に主体と客体を結びつける。それは、直接的「媒介なき(immediate)感覚」なのだ。生物は見ることに、聞くことに、嗅ぐことに、味わうことなくとも生きることが出来る。しかし、アリストテレスの言うように、「触覚を欠いては動物として生存することは不可能である」。これに対して、他の感覚器官は「よく生きること」のために存在するのであり、生命体の存立そのものの条件とはならないのである。

しかし、生存にとって最重要であることと「高貴」であることは別のことである。アリストテレスが「動物」という言葉を触覚の定義の中で繰り返し注目にしていることに注目しなければならない。この反復が触覚の地位を曖昧なものにしているからである。触覚はそれなしではいかなる生物も生きていけないような根本的な感覚である一方、どんな生物もアプリオリに持っているものに過ぎない、と考えることも出来る。視覚は人間の知性的な認識と関わる器官であるのに対し、触覚は人間を動物から区別する^⑧シヒヨウ

にはならないのである。「人間はポリスの動物 (Zoon Politikon) である」という『政治学』の有名な断言があるが、アリストテレスにおいて人間を動物と区別するのは、社会や共同体において「よく生きる」意志であり、それを支える知性である。視覚はこのような高度に人間を人間たらしめる特質と深い結びつきがあるのだ。視覚と触覚という二つの感覚は、人間と動物の区別ともかわりながら、アリストテレスによって階級化されたのである。

(注1)
モダニズムの時代において触覚が重要なものとして浮上してきたのは、ひとつには「人間」と「動物」の境界線がゆらぎ、「人間」のなかに内なる「動物」が生の実実として見出されるようになってきたからである。キャリー・ローマンが詳しく分析しているように、ダーウィン主義とフロイト主義の言説は、モダニストの動物や動物性についての言説に強い影響力があった。二〇世紀初頭には、見かけの「動物らしさ」よりは人間の内的な動物性が表象の領域に現れ、フロイトの無意識概念と結び付けられたのである。エミール・ゾラやセオドア・ドライサーのような自然主義作家は人間の制御のきかない欲望を動物的他者性と結び付けたし、D・H・ロレンスやフランツ・カフカのようなモダニスト作家は、もっとはつきりと人間は動物であるというダーウィンの事実をロテイ^(注2)させた。モダニズムにおいては、人間の主体における動物性は、目には見えない非人称的な「真実」を構成したのであり、それはモダニストの芸術家や作家たちによって触覚と結びついた言説によってしばしば表現されたのだ^B。西洋の長い歴史の中で周縁化されてきた触覚は一九世紀から二〇世紀にかけて動物的な隠された「真実」として本質化されたのであり、その有機的な価値はモダニズムの時代における視覚文化や技術の発達とのあいだに弁証法的な関係を築いている。

触覚のモダニスト的「真実」はまた原始的なものと深く関わっており、近現代のテクノロジーの理想と相反する価値を体現している。マリアナ・トーゴーヴニツクがその著作を通して鋭く示したように、「原始的なもの」は西洋モダニズムの重要な一部であった。二〇世紀最初の数十年において植民地から輸入されたアフリカのプリミティブ・アートは、フランスのキュビズムやドイツの「青騎士」の芸術運動に大きな影響を与え、パブロ・ピカソの芸術的達成を可能にした。二〇世紀において「プリミティブ」はもはやただ「他性」を意味するものではなく、すべての人間に内在する「真実」を表すものとなっていた。あ

るいは、「他性」こそが「真実」であるという等式が二〇世紀において確立されたといってもよい。マイケル・ベルは「プリミティヴィズムは……文明化された自己とそれを拒否し改変したいという欲望の相互作用によって生まれたものである」と適切に説明している。このようにモダニズムとプリミティヴィズムという二つの互いに離れた時間を代表する概念の^④カラミ合った関係は、近代的な主体を個人のレベルでも集団的なレベルでも二重化した。近代的主体における動物性が隠された「真実」を構成するとすれば、有機的、あるいは前歴史的な社会は現代社会が持つていない集合的な「真実」を表象したのだ。

^c 近代社会の古代社会への憧憬、あるいは欲望は、ジークムント・フロイトが一九二九年に発表した『文化への不満』において詳細に検討されている。フロイトは、人間の社会的な苦悩の源泉をたどりながら、「人間がみずから作りだした制度が、なぜすべての人に保護と恩恵を与えないのか」という問いを提出し、それについて人間の行為を規制する制度も実際は人間の心的本性に基づいた「自然の一部」である可能性を示唆し、次のように述べている。

この可能性をさらに追求していくと、驚くべき主張に^⑦ソウグウすることになる。あまりに意外な主張なので、しばらく検討してみたいのである。この主張によると、人間が^⑥ヒサンになる原因の多くは、いわゆる文化にあるというのである。文化を投げ捨てて、原始的な状態に復帰すれば、はるかに幸福になれるだろうというわけだ。

「文化を投げ捨てて、原始的な状態に復帰する」という欲望。これは「文化」が社会全体を覆うような抑圧として作用する時代にか起きえないノスタルジックな反応である。「原始」と名指されるものは実際に存在した文明であるよりは、近現代人の集合的なファンタジーであるのだ。プリミティブなものへの「回帰」の欲望を叙述するフロイトは、著作の中でしばしば原始的なものを触覚と結び付けている。たとえば一九一三年に出版された『トーテムとタブー』は、「触れることによるこび」と心的、身体的接触をめぐるタブーのあいだの精神的緊張に見られる法と欲望の対立を、未開社会の風習を例に描き出している。彼の記述において、文明の発達段階における初期段階である「原始的社會」は、臨床的な精神分析の重要な起源である「幼年期」と重ね合わせられるの

だ。^(注3)「トーテム」や「タブー」など原始社会の禁忌の構造を探究することは、人間のなかの抑圧された古層を探り当てることと等価なものとなる。それゆえ、次のような個人の触覚的欲望と抑圧をめぐる葛藤の描写が、『トーテムとタブー』という原始社会の集合的心的構造を分析した書物に現れるのは不思議ではない。

「はじめに、『接触』という快楽があった」、とフロイトは言っている。この無条件の「はじめに」に注目しなければならない。接触は言語や視覚に先立つ、身体的な快楽を基盤とした内発的な欲望であるのだ。これに対比されるのは後になつて、外部からやってくる「禁令」である。この「禁令」は個人の中で内面化され、原初的な接触への欲望を抑圧するものではあるが、それを消し去りはしない。したがって、この X と Y の葛藤は解決しがたい問題として個人の中に残るわけである。フロイトにおいて、あるいは多くのモダニストにとって、「はじめにあるもの」は「後からやって来るもの」より常に本質的である（あるいは後からやってきたものであつても真に本質的なものは、「実ははじめからあつたもの」とされる）。フロイト、そしてメラニー・クラインにおいて、母（乳房）への触覚的な愛着は欲望の最も初期の段階において見られるものであり、最もはじめに抑圧される欲望であるのだ。そして、そのような欲望の「ザセツ」こそが主体の形成にとつて重要な契機となる。先に述べたようにこのような個人における触覚の抑圧の考察は、社会の集合的な触覚をめぐる言説についてもあてはまる。原始的な共同体において聖なるものと汚れたものに触れるのは、しばしばともに絶対的な禁忌であるが、それは触れることへの欲望がいかに根源的であるかを物語っている。フロイト的なモデルによる社会は、接触への欲望とその禁止のあいだの根本的な両面価値によつて構造化されているのだ。

このようなフロイトの分析は、モダニストの触覚言説の範例的なパターンを示している。すでに述べたようにフロイトの議論の最も重要な特徴の一つは、個人の心理的な成長と文明の発展の間には平行性があるという前提である。身体感覚についての言語を社会、文化、共同体の描写に用いるという考え自体、個人の身体と集合的な存在物のあいだに想像的なつながりがあるという前提に立脚している。触覚的な共同体はマルクスが「有機的社会」と呼んだようなものとして、しばしば想像されている。そこには身体的、心理的、社会的な「疎外」は存在しない。ロレンスとステイグリッツ・サークルのメンバーたちの一部は、人と

人との接触が失われた、非人間的で技術的で資本主義的な社会と対立するようなものとして、ユートピア的で触覚的な共同体をイメージし、それを共有していた。モダニズムの芸術家たちは、身体的な触覚のなかに原始的な「真実」を見出したのであり、それが身体性の集合的な側面への信念を通じて、彼らを古代へとつなぐものとして機能していたのだ。

フロイトが古代社会における接触への欲望と恐怖の両面感情を描き出していたように、触覚は相反する感情に結びついている。それは、親密さや親切さなどのポジティブな感情も、嫌悪や恐怖などのネガティブな感情も喚起しうるのだ。接触の意味はさまざまな解釈に開かれており、個人の感性に依拠している。しかしながら、感情は単に個人的に決定されるわけではなく、歴史的、文化的な要素に左右される。社会的に差別された人びとはしばしば「不可触民」^①と分類され、他人に触れられる恐怖は、人種、ジェンダー、階級などの概念化と重要な関係がある。純粹さ、純潔や貞節、あるいは汚らしさや感染、猥雑さといった概念は、視覚的にだけではなく触覚的に定義された社会文化的な概念である。近現代における触覚についての議論は、必然的に感情の歴史的な条件についての考察を含むのである。

最も基本的な生命の感覚というアリストテレスによる触覚の定義は、ダーウィンやフロイトによる人間の内なる動物性や原始性という概念と一体となり、目には見えない内なる「生」という概念を形成した。モダニズムによる触覚の強調は革命的性格を持ち、それは既存の表象システムに依存することを拒否したのである。触覚言説は周縁的な場所から物事を眺める方法を示唆していると言っただけでは十分ではない。よりラディカルに、それは近代的な主体の「内なる他者」を示し、西洋の時空間の概念の限界を明らかにしたのである。

(高村峰生『触れることのモダニティ』による)

(注)

- 1 モダニズム——二〇世紀初頭に西欧で起こった芸術運動で、現代的・前衛的な新しさを求めた。近代主義。
- 2 プリミティブ——原始的なさま。
- 3 トーテム——未開社会において部族と深い関係をもつ象徴として崇拜される動植物や自然現象のこと。

問一 傍線部ア～㉔の漢字に読みがなをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「アリストテレスの理論において触覚は疑いなく根本的なものということになる」とあるが、どういふことか。本文の文脈にそくして六〇字程度で説明しなさい。

問三 傍線部B「西洋の長い歴史の中で周縁化されてきた触覚は一九世紀から二〇世紀にかけて動物的な隠された「真実」として本質化された」とあるが、「触覚」の位置づけの変化を九〇字程度で分かりやすく説明しなさい。

問四 傍線部C「近代社会の古代社会への憧憬」とあるが、それはどのようにして生じるのか。七〇字程度で説明しなさい。

問五 文中の空欄XとYに入れるのに適切な語句を本文中から抜き出して書きなさい。

問六 傍線部D「近現代における触覚についての議論は、必然的に感情の歴史的な条件についての考察を含む」とあるが、どういふことか。八〇字程度で分かりやすく説明しなさい。

(二)

次の文章と参考資料を読んで、後の問いに答えなさい。

永長元年八月七日かくれさせ給ひにき。⁽¹⁾その年、⁽²⁾大田楽とて、都にも、道もさりあへず、神の社々、このことひまなかりける、御事あるべくてなど、世に申しける。この御事を、白河院嘆かせ給ふこともおろかなり。これによりて、御髪おろさせ給へり。「あさまし」など申すもおろかなり。

御乳母子のまだ若くて二十一とか聞こえしも、法師になり侍りし、かなしきことわりと申しながらも、若きそらにいとあはれに、ありがたき心なるべし。日野といふ所に住むとぞ聞き侍りし。

次の年の秋、昔の御事思ひ出でて、その知信の大徳、

かなしきに秋はつきぬと思ひしを今年も虫の音こそなかるれ

と詠みて、筑前の御とて、伯の母と聞こえしがもとに遣はしたりければ、筑前、かへし、

虫の音はこの秋しもぞなきまさる別れの遠くなる心地して

と侍りしを、金葉集には、聞きあやまりたるにや、書きたがへられてぞ侍るなる。

六条院に御堂たてさせ給ひて、昔おはしまししやうに、女房、侍など、かはらぬさまに、いまだ置かれ侍るめり。御悲しみ、昔も類ひあれど、かかること侍らず。

(『今鏡』「根合」による)

〔参考資料〕

『金葉和歌集』巻第十 雑歌下

郁芳門院かくれおはしまして、またの年の秋、知信がりつかはしける

康資王母

うかりしに秋はつきぬと思ひしを今年も虫の音こそなかるれ

返し

知信朝臣

虫の音はこの秋しもぞ鳴きまさる別れの遠くなる心地して

(注)

1 かくれ——郁芳門院が逝去したことをいう。郁芳門院(媼子内親王)は白河院の皇女。

2 大田楽——大規模な田楽。田楽は、器楽を伴う集団的な踊りを主とする芸能。

3 御乳母子——藤原知信。母は郁芳門院の乳母。

4 大徳——徳の高い僧。

5 筑前の御——高階成順の娘。康資王の母。「伯の母」とも呼ばれた。

問一 傍線部ア「かくれさせ給ひにき」から助動詞をすべて抜き出し、それぞれの終止形、意味を記しなさい。意味は、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

受身 自発 尊敬 使役 仮定 推量 意志 過去 完了 強意

問二 傍線部イ「あさまし」とは、どのようなことについて言っているのか、具体的に記しなさい。

問三 傍線部ウ「今年も虫の音こそなかるれ」を、ことばを補って現代語訳しなさい。

問四 傍線部エ「書きたがへられてぞ侍るなる」とあるが、金葉集にはどのような誤りがあると言っているのか、説明しなさい。

問五 傍線部オ「御悲しみ、昔も類ひあれど、かかること侍らず」とあるが、どのようなことを言っているのか、「かかること」の内容を明らかにしながら説明しなさい。

(三)

次の漢文を読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上送り仮名を省略した箇所があります。

曾^(注1)子有^リ過^チ、曾^(注2)哲引^{キテ}杖^ヲ擊^ツ之^ヲ。仆^{たふレ}地^ニ、有^{リテ}間^{しばらく}乃^A蘇^ル。起^{チテ}曰^ク、先生得^ル無^キレ

病^ト乎。魯人賢^{トシ}曾^ヲ子、以^テ告^グ夫^(注3)子^ニ。夫^ヲ子告^グ門^ニ人^ニ、参^{タレ}来^レ、汝不^ル聞^カ昔^ノ者^ヲ舜^(注4)

為^ル人^ニ子^ニ乎、小^(注5)箠^ハ則^チ待^チ答^ヲ、大^ハ杖^ハ則^チ逃^ル。索^B而^{ツカハントスレバ}使^レ之^ヲ、未^①嘗^①不^レ在^レ側^ニ、

而^{レドモ}欲^{スレバ}殺^{サント}之^ヲ、則^チ不^ル可^{カラ}得^也。今^{ネテ}汝委^ヲ身^ヲ以^テ待^チ暴^ヲ怒^ヲ、拱^{シテ}立^{シテ}不^ラ去^ト、殺^{シテ}身^ヲ

以^テ陷^{ルルハ}父^ヲ不^ニ義^ニ、其^ノ不^ノ孝^C孰^{ナル}大^{ナル}焉。汝非^{ザル}王^ニ者^ニ之^ニ民^ニ也、其^ノ罪^②何^ト如^ト。

〔韓詩外伝〕による

(注) 1 曾子——孔子の門人・曾参。

2 曾哲——曾子の父。

3 夫子——孔子の別名。

4 舜——太古の聖人。父が乱暴者だった。

5 小箠——竹製のやわらかなムチ。

問一 傍線部 A・B・C の読みを、平仮名で答えなさい。送り仮名のつく語はつけて答えなさい。

問二 傍線部①は「未だ嘗て側に在らずんばあらず」と読みます。この読みにしたがって、解答欄の白文に返り点をつけなさい。
(送り仮名不要)

問三 傍線部②は、具体的にはどのようなことが「罪」だと言っているのか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。